

「それが 何か？」

ダニエル 3 章

仕事に追われたあるクリスチャンが、ふとそのおかしさに気づき、仕事のペースを緩めた。その時、周りは「そんなことをすれば、売りにひびく」「なんとか急いでやってほしい」とプレッシャーをかけた。しかし、彼はこう答えた。「それが どうした」

仕事は罪ではないが、わたしたちの生き方の優先順位において一番ではない。やはり、神、家族、仕事の順番ではないだろうか。仕事が一番になると、一番大事な神との関係、家族のケアを忘れ、罪にとらわれやすくなる。今日の箇所は、その畏にはまらなかった 3 人のユダヤ人の話だ。

今から約 2 6 0 0 年ほど前、当時のメソポタミアを支配していた新バビロン帝国の王、ネブカデネザル。彼は領土を拡大し、捕虜を各国から集め、自分に権力を集めた絶対政治を行っていた。そして、ついにはおそらく自分に似せて作らせた金の像を拝め、と国民に強制するに至った。人々の心を一つにし、国に貢献させるために、信仰心を利用するのは、よくある話だ。ローマのカエサル、フランスのナポレオン、ドイツのヒトラーも国を動かすために自分を拝ませる、または拝ませるような制度を導入した。そして従わない者は処刑した。

彼らも人間、まさか自分は神だ、などとは思っていないと思う。しかし、国を簡単におさめるためには自分を拝ませるとするのが手っ取り早かったのかもしれない。では国民の側はどうだろうか。もし、あなたがそれらの国の市民であったら、どう行動するだろう。ネブカデネザル王も、その金の像も神ではないことはわかっている。しかし、便宜上それらを拝めば、少なくとも一時的な平和と経済的安定が得られる、と来たらどうするだろう。もし私が主イエスを信じていない、また聖書も読んだことがない、そういう者だったら、王のいうことに従って、像を拝んでいた可能性が高い。

冒頭述べた 3 人のユダヤ人もおそらく私と同じように、拝んでしまえばいい、と思ったかもしれない。王に気に入られるという誘惑にひかれ、あるいは火の中に投げ込まれるという刑罰を恐れて、拝んでいたかもしれない。元来びり屋の私なら、ほぼ確実に王の命令にしたがってしまったことと思う。しかし、3 人はそうしなかった。なぜだろうと考えるに、彼らの思いや心配を主が取り除いてくださったのだらうと思われた。

今日、私たちには彼らの体験したような迫害に会う可能性は少ないかもしれない。しかし万一そのような環境に出くわした時にどう行動するか、心配になる。でも主はこう約束された。「何を話そうかと心配するには及びません」(マタイ 10 : 19) 3 人のユダヤ人、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはその場で聖霊に導かれ、大胆にも王に対して「答える必要はない」「神は救い出せる」「たとえ死ぬはめになっても、金の像は拝まない」と宣言した。

私たちも同じように主が宣言させてくださる。主の愛はそこまで私たちを面倒見てくださるのだ。それにたとえその点で失敗したとしても、主は悔い改めの機会を与え、必ずわた

したちを立ち直らせてくださる。それほど主の愛とその印である十字架の救いは深いもの
だと思う。

主はご自分をよく「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と言われる。主は彼らの
信仰を認めて「そういう人たちの神」であることを喜び、感動しておられる。では「シ
ヤデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神」と言われるのは喜ばれるだろうか。もちろんそ
うだと思ふ。それどころか「ペテロ、ヤコブ、ヨハネの神」「パウロ、バルナバ、テモテの
神」という言い方をも、認め、喜んでおられるのではないだろうか。

だとしたら、今のわたしたちに対しても同様のはずだ。主は「わたし=遠藤の神、村田の
神、大場の神…」という言い方で今、ご自分を紹介している。あなたの神であることを喜
び、私たちのためにとりなし、導いてくださる。その恵みに心から感謝したい。その愛が
わかれば、たとえ偶像崇拝を強要されても、間違った価値観をおしつけられても「それが
何か？」とはっきりと答えられる。主が私たちに語らせてくださるからだ。